

道 徳

宮 島 浩 典

1 道德教育の本質について

一人一人の児童が道德的価値を内面的に自覚し これからの自分の生活や行動の中に反映していこうとする意欲や態度―道德的実践力―を育てること

人間は本来、より善く生きたいという願いを持っている。それは、自分の考えのまま、ありのままに、自由に生きてみたいという思いであり、また、自分を取り巻いている社会や仲間・集団から認められたいという思いでもある。

前者は、個々人の生活態度に関係する価値判断であり、自分自身の生き方に関わる個人的倫理観によるところが大きい。後者は、社会的ないしは集団的道德と考えられるもので、集団内に適応する価値判断の総意として示される。

個人一人一人に、社会的・集団的道德（慣習、作法、おきて、あるいは常識など）が働き価値を持つには、常に生きている個々人の意識がその中になければならない。一方的な外からの権威や強制・命令という形での注入や教え込みでは、批判・反発を呼び起こし個人に受け入れられない。個人が自分の良心に鑑み、主体的にこれを是認し肯定・同意しながら意識の中に浸透させていってのみ道德的態度は可能となるのである。同様に、自分なりの価値判断によるところの個人的倫理も社会的集団的な道德の援助を得てのみ、主観的・独断的な判断や態度を克服することができ、社会の一員としての道德的態度をとることができるようになる。

このように考えると、二つの事象は相反しながらも互いに補完し成立していると考えられる。

つまり、道德とは、常に自分はどうかあるべきか悩み、迷い、苦しみ葛藤を繰り返しながら価値を自分自身で見つめなおしていく内面的自覚に他ならない。そして、この意識を大切にしながらより高い価値を選択し、自分の生活や行動の中に反映していこうとする道德的実践力を育てていくことこそ道德教育の本質に位置すべきものだと考えている。

2 本質に基づく基礎・基本について

これまで、道德の授業で正直という価値を扱った際に、「人間は正直であるべきだ。正直はいいことだ。」として授業が構成されてきた。そのために授業者は価値を教えようとするし、子どもたちも「正しいこと」と分かっているのだから、教師の路線から外れることなく、知識だけで価値を理解し、平坦で深まりも広がりもない授業になってしまうことが多かった。

しかし、「なぜ、正直でなければならないのか。」といった道德的原理・原則にまでさかばって考えた時、教師自身も一方的に価値を押し付けるような指導であってはならないという反省が生まれてくる。また、子どもたちも、様々な思いを知り「ものの見方・考え方」の問い直しが可能になり、一人一人の思いを更に深めることにつながっていく。そして、子ども達自身がお互いの考え方や感じ方の中から、道德的価値に照らして自分を振り返り、自分なりの生き方の指標を持つことができればと考えている。

それが、自ら価値があると判断したことに対して、追求し続けたり、達成しようとする態度であるし、逆に価値がないと判断したものについては、他者からいくら誘われても自制し、自らを律していくような、より高い価値を目指す「善意思」へとつながっていくと考えるからである。

道德的価値に照らして自分を振り返り 自分なりの生き方の指標を持とうとすること

3 自己の学びを広げ深めるについて

道徳教育において自己の学びを広げ深めていくという過程は、子どもたち一人一人が単に価値について分かったということではない。道徳教育の本質が、道徳的実践力の育成を目指すものなら、学びを広げ深めるためには、価値への理解・判断があり、価値の実現を求めようとする意思(実践意欲)が働かなければならない。もちろん、快楽、賞罰、賞賛、避難などの他の理由からの実現を求める意思ではいけない。本人の内なる良心を介しての自主性、自発性、いわゆる自覚を伴うべきものでなければならない。

(1) 実践意欲を高める価値葛藤の場を設定する

人間は現実の生活において、価値葛藤の場に直面することが多々ある。その中で我々は絶えず価値選択という判断に迫られている。それは、「善」とよばれる価値が現われるような、「より高い価値」を選んで「より低い価値」を退けることかもしれない。また、逆に「悪」とよばれる価値が現われるような「低い価値」に流されてしまうことなのかもしれない。

道徳の学習を通し、互いの意見を交流させたり、認め合ったりするなかで、子どもたちが、価値の高低、あるいは強弱の相反する二つの間で、そのいずれを選ぶのか、内面における意識の揺れが生ずる場を与えていきたい。それが、子ども達にとって、生きた人生の問題を含む現実と正面から取り組み、その中に含まれる価値の対立、葛藤を克服し、生きた実践意欲につながると考えるからである。

(2) 他の教科との結び付きを深めたり、体験活動を取り入れた道徳の時間を計画する

経験が道徳的価値を把握するうえで重要な役割を果たすことは周知の事実である。しかしながら、道徳で扱う価値は子どもたちにとって抽象的で一般的なものであることが多い。一方、子どもたちの経験は少ない。また、経験があっても特殊なことで価値には結び付かないことが多い。

つまり、価値だけを取り上げては、実践意欲の面から見ると「わかってはいるが」となってしまう、そのねらいは達成されないことになってしまう。

そこで、子ども自身の現実的経験を話したり、広めたりする場を設ける。紙芝居形式で読み物資料を与えたり、ビデオ・録音テープなどの視聴覚教材を利用し想像的な経験を容易にする。

教師が意図的に子どもに経験させたものを教室に持ち込んだり、役割演技や動作化などの追体験を取り入れた工夫的経験(他教科との結び付きや体験活動も)などで道徳的状況を膨らませていくことが大切なことになってくる。

このように、抽象的で一般的な道徳的価値と体験などでの具体的な行為を結び付けていくことが、対象と自己がより深く関わり合うことであり、子どもたちの内面に働きかける力になると考えるからである。

(3) 自己の価値観を認識する場を設ける

自分なりの意識や考え(価値観)を理解しておくことは、道徳では大切なことである。自己の価値観を認識しておけば、最初の自分から学習し高まった自分をふりかえる基準が持てることになるからである。これまでの思いはこうだったが、今は少し考えが変わったように思う等、自分の考えを明確化できることとなる。

また、自己を振り返ったとき、自分の考えを変えていく要因となったものは何であったのかも自己内対話を通して自覚できることとなる。それは、意見交換や交流の中での他者の影響であったかもしれないし、他の意見の中に自己の内にはまだない、より高いものとの出会いであり、深まりであったかもしれない。あるいは、その価値に対しては考えを少しも変えない自分との出会いがそこにあるかもしれない。

グループ学習やペア学習・板書におけるマグネットシートなどを利用し話し合い活動を深めたり、自分の思いや考えをワークシートに表わしたりしながら、自分の価値を認識する場を設けていきたい。

4 実践例 —第1学年—

(1) 主題名 お手伝い 資料名「ぼくにもたせて」 4-2 家族愛

(2) ねらい 祖父母を敬愛し進んで家の手伝いをしようとする態度を養う

(3) 指導にあたって

主題について

児童にとって祖父母は、慈しみ、優しさを持って自分たちを温かく包みこんでくれる存在である。そんな祖父母に対し尊敬の念を抱き、大事にしようという親愛の情を持つことが祖父母を敬愛することである。

核家族が多くなった現在、祖父母とふれ合うことが少なくなり、祖父母に対する敬愛の念が育ちにくい現状が生まれている。

しかし、孫を思う祖父母の様子を知ることにより、自分達自身も祖父母に何かをしてあげたい、役に立ちたいと考える。その一つの表われがお手伝いであろう。祖父母に感謝し、家族のために自分のできることを進んで行い、共に生きていこうとする態度の素地作りになればと思いこの主題を設定した。

資料は、祖父と一緒に買い物に出かけたたろうと祖父との温かいふれ合いの様子が書かれている。

両手に荷物を持つ祖父を見て、重そうだと思いやる孫。孫の気持ちを受け入れながらも、孫を気づかう祖父。そうした二人の互いに相手を思いやる気持ちを深く考えることで、協力しあう家族の良さを感じることができればと考えている。

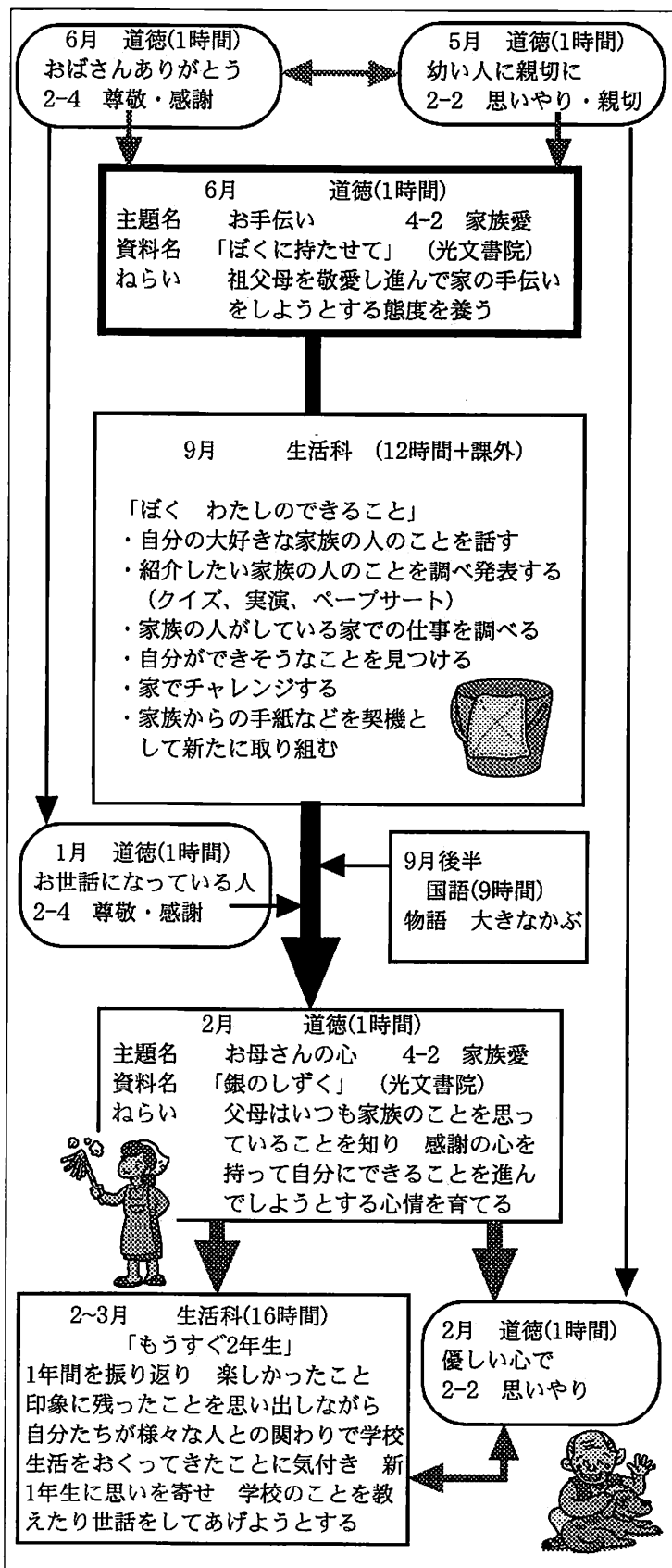
本主題の基礎・基本

家族相互の愛情はごく自然なものであり、だれもが持っているものである。

そして、児童に「なぜ、家族を大切にしなければならないのか。」と聞けばそれは当たり前だからという答えしか返ってこない。根底に流れる愛情や思いやり、いたわり合う気持ちを持って接することの大切さには気づいていないことが多い。

特に1年生の児童にとっては、家族が自分たちにいろいろなことをしてく

「家族愛」を中心としての関連



れるのは当然のことと考えていて、自分も家族の一員として家族のために何かできることをしようと自ら思い立つことは少ない。

そこで、資料を読んだり、自分なりの思いに根差した考えを出し合ったり、友達の考えを聞いたりするなかで、自分なりに家族を見つめ直し、思いを寄せることができればと考えている。そのためには、それぞれの家庭での異なる生活習慣や価値観を持った一人一人の考えを認め合っていける自由で温かな雰囲気、「仲間っていいな」という意識に寄与するところも大きいと考えられる。

以上のように、道徳では、望ましい集団の中で道徳的価値に照らし自分を振り返り、自分なりの生き方を探っていく姿勢を大切にしていきたい。

学びを広げ深めるために

① 価値葛藤の場の中で自分なりの考えを持つことができるようにする

価値葛藤の場は問題意識を持つ場でもある。祖父と孫とのそれぞれの思いを知る中で、「自分ならどうあるべきだったのか」「家族のことを自分はどう考えていたのか」といった主体的で自己の内面に迫る活動ができるものと考えている。

② 役割演技を取り入れ、より内面に働きかける力を育てる

道徳的価値と具体的な体験を結びつけることで、より価値が意識されたり、子どもの内面に働きかける力となり学びが広がっていくと考えている。本時では主人公と同じような荷物を持つ役割演技を通し、自分の抱いていた観念と実体験による行為のずれに気付かせていきたい。

③ 価値形成のプロセスを大切にしながら、自己の価値観を認識する場を設けていく

「家族が自分の世話をしてくれるのは当然だと思っていた」「あの時の友達の話聞いて少し家族や祖父母に対する考えが変わった」というように自己の価値観を認識したり、価値形成による自分の考えの変遷を明らかにすることが自らを追求する活動につながる。また、それが自他の存在を認め望ましい集団づくりの要因ともなると考えている。

(4) 本主題における授業の実際と考察

ここでは、学びを広げ深めるために設定した①～③の項に基づき実践した授業の実際について考察していく。

○祖父母がいてよかったと思ったことやその時の気持ちを話す -学びを広げる深める③-

- | | |
|----------------|-----------------------------------|
| T | おじいちゃんやおばあちゃんがいてよかったなと思ったことがありますか |
| C ₁ | いつも帰ったら家にいてくれる |
| C ₂ | 休みの日に遊びにつれていってくれる　そして何か買ってもらう |
| C ₃ | 何でも買ってくれる　いっぱい買ってくれる |
| T | 何か買ってもらうとどんな気持ちになるかな |
| C ₄ | うれしい |
| C ₅ | ラッキー |

導入の場面では、学びを広げ深めるために③「価値形成のプロセスを大切にしていけるとともに自己の価値観を認識する場を設けていく」の準備段階になればという考えで取り組んでみた。価値形成のプロセスの面では、子どもたちが本時の対象である祖父母の存在を意識し、祖父母に関心を持てるように発問を考えた。1年生の発達段階からみて自分に何かをしてくれる祖父母というとらえ方が一番自然なのではと考え、今の祖父母への思いをベースにしながら学習に入るように心がけた。

子どもたちは、祖父母に何かを買ってもらったこと、遊びに連れて行ってもらったこと、お小遣いをもらったことなどを口々に話していた。

この場面から、自分がどれだけ祖父母に何かをしてもらったかが、子ども達にとっての「いいおじいちゃん・おばあちゃん」の観点となるかが浮かび上がってきた。子どもたちの意見は後の

価値を認識したり、自分の考えの変遷がわかりやすいように板書して残しておいた。

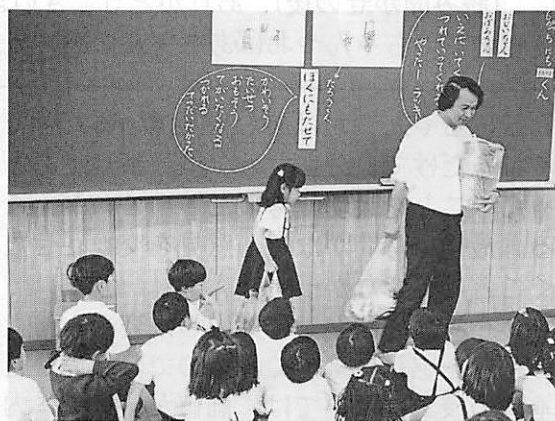
○資料「ぼくにもたせて」を読んで話し合う -学びを広げ深める②-

- T みんな おじいちゃんと一緒に買い物に行ったことあるかな
C₁ ある ある(大勢)
T おじいちゃんと一緒に買い物に行く たろう君はどんな気持ちだったかな
C₂ おじいちゃんが好き
C₃ おじいちゃんを手伝いたい
T どうして買い物の帰り道 たろう君が荷物をぼくに持たせてと言ったのかな
C₄ おじいちゃんの腰が痛くなるから
C₅ 重くて大変だから
C₆ おじいちゃんが かわいそうだから
C₇ おじいちゃんの手が痛くなるし 疲れるから

ここまでは、展開の前半部分のおおまかな授業のやりとりである。資料については、内容がわかりやすいように場面絵を用意しながら、紙芝居形式で読み聞かせていった。その中で、子どもたちは資料の主人公の行動を当然の事のように考えている。かわいそうだから、大変だからと頭の中では祖父を思いやることの大切さを理解しているようにみえる。しかし、導入部分の祖父母に対する意識を考えると、かなりの違いが生じたようである。

そこで、今度は資料と同じように重い荷物を持つ役割演技を取り入れることにより、子どもたちの意識のずれを感じさせたいと考えた。それが、学びを広げ深めるために②の「役割演技を取り入れ、より内面に働きかける力を育てる」である。

- T それでは 実際にスーパーマーケットから帰るところをやってみよう
先生がおじいちゃんをするので みんなは たろう君の役をやってください
(役割演技を終えて)
C₁ たいしたことはないと思ったけれど 重かった
C₂ 重い 重い
C₃ がくっと疲れた
C₄ ちょっと重かったです
T それでは みんなが手伝ってくれなかったということで 荷物全部を先生一人で持ちます
(ガチャーン)
T 先生 重くて落としてしまいました
手を見てください どうですか
C₅ 赤くなっている かわいそう
C₆ とってもかわいそう
T 手伝ってくれて おじいちゃんはどうな気持ちだったかな (略)
T お母さんは この話を聞いてどう思ったかな (略)



役割演技で荷物を持つ (あー重い)

役割演技では、より多くの子どもに関わらせたいと思いながらも、時間的な制約があり、なかなか全体を高めたり、自分なりの考えに揺れを持たせたいという点では、今一步であったが、子どもたちは自分の生活を振り返り自分達なりに考えを持つことができたようである。

○自分の生活経験をもとに考える -学びを広げ深める①-

T たろう君と自分たちを比べるとどうかな

C₁ 何かぼくたちの方がだめみたい ぼくたちはおじいちゃんに優しくしていない(ありがたいの気持ちはあるんだけど)

C₂ たろう君の方がえらい 何かへんな気持ちになる おじいちゃんを大切にしていあげようと思う

C₃ おじいちゃんの事を考えずに自分の事ばかり考えてる 欲しいもの買ってばかり言ってる

ある子は自分の初めの考えとの違いに当惑し、へんな気持ちになると自分を表現した。彼はおじいちゃんが大好きで、いつもおじいちゃんにかわいがられている。しかし、今までの自分は本当はおじいちゃんのことを考えていたのか迷っていたようである。

また、自分のわがままに気付いた子、どうして気持ちはあるのに優しくできないのかを考えた子など、かなり揺れ動いた子どもたちを見ることができた。この場面で、学びを広め深めるの①にあげた、自分なりの葛藤場面を少なからず設定できたのではと考えている。

○「おばあちゃんがいるといいのにな」の読み聞かせを聞く -学びを広げ深める③-

T 先生がお話のプレゼントをします 先生には もうおじいちゃんもおばあちゃんも亡くなっていますが 昔のことを思いだしながら この本を読みます

C₁ (読み聞かせの後) ありがとうございます

C₂ おじいちゃんやおばあちゃんの顔 見たくなかったな

おじいちゃんやおばあちゃんはいらただけでいい。何もしなくても、何をしてくれなくても。いてくれるだけで自分にとっては、幸せである。もっと、今の幸せを感じ、おじいちゃん・おばあちゃんのことを大切に考えたい。これが、この本を通し、子どもたちに感じて欲しかったことである。最後は時間がなく、意見を交換させたり、自己の価値観を認識したりというところまでは行くことはできなかった。

しかし、読み聞かせに集中した姿や、何人かのつぶやきを考えると、子どもたちはしっかりと本の内容を感じ取ってくれたのではないかと考えている。

本時の授業については、価値が、意識-内省-追体験-主体化-意欲化-生活化と結び付いていくように構成してきた。子どもたちは、これまで持っていた、何かをしてくれる祖父母がいい祖父母という考えから、今は祖父母のことを自分にとってかけがえのない人と捉えようとしている。そんな、自己の価値観を認識する場や自分がそう判断していった価値葛藤の場のとらえが弱かったという思いは持っているが、家族愛という価値観を再認識させたり、揺り動かしたりしながら、自分自身を振り返り、自分なりの生き方の指標を持とうとすることを基礎・基本として授業を展開してきた方向性は妥当であったと考えている。

子どもたちは役割演技することにより観念と現実の行為の狭間に迷い、自分の思いを話しながらも、自分の考えに自信が持てず、互いの感じ方を必要とした。そして、その中から自分なりの生き方や思いを少しは見つけることができたのではないかと考えている。

一時間の授業の中で、本当に1年生の子どもたちが集中した場面は、紙芝居形式で資料を与えた時、役割演技を取り入れた時、そして、終末の絵本を読んだ時である。この活動はどれも、子ども達が自分にとって身近なものであると感じた時である。今後は、授業の中に、この身近な活動を多く取り入れながら、より自己の学びを広げ深める場を設けていきたいと考えている。